

あしぎん香港レポート

2017年10月号

- 【調査レポート】香港における介護の現状・・・・・・・・・・・・・1
- 【トピックス】香港の産業構造・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
- 【アセアンレポート】タイの労働市場・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
- 【ニュース一覧】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
- 【香港コラム】中秋節・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

足利銀行香港駐在員事務所
SUITE 1601, 16/F, TOWER2, THE GATEWAY,
HARBOUR CITY, TSIM SHA TSUI, KOWLOON,
HONG KONG
TEL:+852-2251-9475
FAX:+852-2251-9476

本レポートの内容につきましては、弊行の信頼し得る先からの情報に基づいて作成しておりますが、その正確性、信頼性を保証するものではありません。具体的に法律上、会計上、税務上の助言を必要とされる場合は、それぞれの専門家にご相談下さいますようお願い致します。



足利銀行



【調査レポート】

－香港における介護の現状－

1. はじめに

香港は、日本を上回る世界一の長寿地域です。香港人の平均寿命は、男女共に 80 歳を超え、今後ますますの伸びが予測されています。日本では、高齢化が進展してきたことにより、介護需要が拡大してきました。では、香港における介護事情はどのようになっているのか。本稿では、香港における介護の現状について、お伝えいたします。

2. 基礎データ比較

香港における介護の現状を確認する前に、香港の人口や平均寿命などの基礎データについて、日本と比較しながら確認していきます。

図表 1 香港および日本の基礎データ比較(2016 年基準、2036 年は予測値)

	単位	香港		日本	
		2016年	2036年	2016年	2036年
総人口	万人	734	814	12,684	11,438
平均寿命	男性	81.32	84.43	80.98	82.94
	女性	87.34	90.44	87.14	89.29
高齢者人口(65歳以上)	万人	116	237	3,459	3,808
高齢化率	%	15.80	29.12	27.27	33.29

出典：香港統計局および厚生労働省データより香港駐在員事務所にて作成

図表 1 のとおり、平均寿命は世界一の香港ではありますが、人口に占める高齢者(以下、本稿では 65 歳以上の方を高齢者と表記)の割合は、日本の半分程度に留まっています。しかしながら香港では、20 年後の 2036 年には、高齢者人口は現状の倍以上に増加することが予測されており、また、高齢化率も現状の倍程度まで増加し、現状の日本を超える割合まで増加していく見込みとなっています。

3. 香港における介護の現状

今後、高齢者の人口増加が予想される香港での、介護の現状はどうなっているのか。

香港では、介護サービスを利用するための公的な支援制度、いわゆる介護保険のようなものはありません。図表 2 のとおり、居住系の公的介護サービスは、サービス内容は日本のものと遜色無い施設となっています。しかしながら、施設などのハード面の供給量が少なく、日本で言う有料老人ホームのベット数は、公的施設で 2 万床弱、民間施設を合わせても香港全体で 7 万床強となっています。現状、香港の高齢者は 116 万人いますので、現在のベット数では高齢者の 6%ほどまでしか供給できていないことになります。そのため、入所待ちの期間が長期化する傾向にあり、

申込みから入所まで、施設の利用料金に政府助成のある公的施設では平均 3 年、施設の利用料金の全額を自己負担する民間施設であっても平均 2 年弱かかり、慢性的な供給不足となっています。そのため、施設利用に関しては、ハード面の供給不足もあり、香港市民が利用するためには、十分な環境とは言えない状況となっています。

図表 2 香港における主な居住系の公的介護サービス概要

施設名称	主な入居条件	サービス内容	日本の該当施設	月額費用
護養院	<ul style="list-style-type: none"> 健康状態が安定しており、基礎レベルの医療サービスの提供に留まる者 身体障害者または認知症患者 	<ul style="list-style-type: none"> 日常生活サポート(全般) 基礎的な医療サービスの提供 看護サービス スタッフが24時間常駐 	特別養護老人ホーム	HKD1,994-(約3万円)
護理安老院	<ul style="list-style-type: none"> 日常生活でのサポートが必要である者 親族からサポートが得られない者 親族に多大な負担がかかる者 	<ul style="list-style-type: none"> 日常生活サポート(全般) 看護サービス、定期検診が受けられる スタッフが24時間常駐 	有料老人ホーム	HKD2,000-(約3万円)
安老院	<ul style="list-style-type: none"> 日常生活に必要な最低限の活動が自分自身で行えるものの、一人での生活は困難な者 	<ul style="list-style-type: none"> 日常生活サポート(洗濯や掃除等、負荷が高いもの) 手紙書きなどのサポート(必要があれば) 家族や地域社会との融和サポート 	有料老人ホーム	HKD1,506-(約2万円)

出典: 香港社会福利会資料より香港駐在員事務所にて作成

そこで、香港の介護現場で活用されているのが、フィリピンなどから出稼ぎで来ている家政婦たちです。一般的な香港人は、夫婦共働きのケースが多いため、フィリピン人などを自宅に住み込ませ、家政婦として雇用しており、介護においても活用しています。家政婦の費用は、月平均 HKD4,100-(約6万円)であり、全額を自己負担しなければなりません。家事全般を行ってくれることを考慮すれば、決して高い金額ではないと思われます。香港には、既に 30 万人もの家政婦が居住しており、既に介護の現場で重要な役割を担っています。そして、今後も香港の介護の現場を支えていく存在であることは、間違いないと言えるでしょう。

香港の 2016~2017 年度予算案では、政府総支出 HKD4,869 億(約 7 兆円)の内、高齢者の生活支援などに充当される社会福祉の予算は HKD724 億(約 1 兆円)、割合としては、総支出の約 15%と少なく、社会福祉は香港政庁の政策において、決して重要視されていない現状と言えるでしょう。これは、前述のとおり香港では、家政婦の活用など介護に関しては独自の体制が出来上がっていることも一因となっています。

4. まとめ

香港は、古くからフィリピンなどからの出稼ぎ労働者を家政婦として活用してきた歴史があり、家政婦を活用する文化が、既に香港社会に深く浸透していることもあり、高齢化社会を迎えた現在においては、その家政婦を介護の現場においても、上手く活用できている状況が理解できることかと思えます。

日本では現在、介護現場における人手不足が深刻化しており、労働環境の厳しい介護士人材については、慢性的な人手不足に陥っています。そのため日本においても、介護現場における人手不足を補うため、外国人の家政婦や介護士を活用していくことが求められ始めており、政府・民間共に、活用に向けた動きが活発化してきている状況にあります。今後、ますます高齢化社会が進んでいく日本にとって、香港で外国人家政婦を上手に活用している状況は、将来の日

本における介護の在り方の参考の1つになるのではないのでしょうか。

【トピックス】

－香港の産業構造－

1. 現在の産業構造

現在香港のGDPに占める製造業の割合は約7.2%で、サービス産業がGDPの90%以上を占めています。この割合は世界で最もサービス産業が主体となっている産業構造です。

香港経済の4大基幹産業は「貿易・物流」、「観光」、「金融サービス」、「専門サービス・その他生産性サービス」となっています。一方、香港が今後のさらなる成長に当たって明らかな優位性を持つ6大産業としては、「カルチャー・クリエイティブ」「医療サービス」「教育サービス」「イノベーション・テクノロジー」「テスト・認証サービス」「環境産業」があります。

2. 産業構造の変化

香港はこれまでに2度、産業構造の転換を経験しています。1つ目は、1970年代に中継貿易拠点から繊維産業などの製造業への転換であり、2つ目は、1990年代に製造業から金融センター、物流基地への転換になります。香港経済は、1960年代から高度経済成長に入りました。また、1980年代までの香港経済の発展は、輸出志向型であり、主に製造業とその製品の輸出によって達成されました。しかしその後、賃金と土地価格の急激な上昇により、製造業の生産コストが上昇したことから、輸出の国際競争力が低下していき、製造業の拠点は、1990年代前半までに中国本土（主に香港と地続きとなる広東省）への移転が進み、香港の製造業は委託加工や直接投資の形で工場を中国本土に移転し、中国本土で生産することにより生産コストの上昇を回避しました。主要な産業であった製造業の中国本土への工場移転により、香港の産業構造にも大きな変化が生まれ、現在のサービス産業中心の産業構造が構成されていきました。

3. 今後の展望

香港政府は、経済成長と生活水準の改善に向けた政策の概要を明らかにしています。経済政策については、第13次5カ年計画や一帯一路構想により、香港の金融・専門サービス、イノベーション、テクノロジーなどの分野で新たな事業機会がもたらされると指摘し、香港の優位性を更に強化するよう要請するなど、サービス産業主体の産業構造は今後も不変であるかと思われます。

4. まとめ

香港経済は、これまでの様々な変遷を経て、現在のサービス産業主体の産業構造を構築してきました。香港政府が、サービス産業に関する政策を推進している現状から考えても、今後もこの

産業構造は続いていくものと思われます。ただし、中国本土の経済発展が進む中で、香港はこれまで以上に高付加価値社会を実現する必要に迫られており、サービス産業における競争は、従来以上に激しいものとなりそうです。

【アセアンレポート】

－タイの労働市場－

1. はじめに

現在、タイに進出している日系企業数は、帝国データバンクの調査によると4,788社といわれています。企業経営における重要な要素として、「ヒト・モノ・カネ」の3要素が挙げられるのは日本もタイも変わりませんが、タイにおいては「ヒト」の面でいくつかの特徴があります。そこで、本稿ではタイの労働市場についてレポートします。

2. タイの失業率

タイの労働市場の特徴として、失業率が極端に低いことが挙げられます。他のアセアン諸国の失業率が3～5%台であるのに対し、タイは1.0%となっています。これは、企業は多くの従業員を雇用して社会貢献するべきであるというタイ独自の考えが浸透していることや、個々の従業員の担当業務が細分化されており、低賃金で多くの従業員を雇う傾向にあることが要因であると言われています。

実際に、バンコク市内の小売店や飲食店に行くと、日本と同規模の店舗において、日本の2～3倍の店員がいることがほとんどです。

【アセアン諸国および日本の失業率】

国	タイ	インドネシア	フィリピン	マレーシア	ベトナム	日本
失業率	1.0%	5.6%	5.5%	3.4%	3.3%	3.3%

(ジェトロ HP より作成)

3. 離職率の高さ

タイの労働市場におけるもう1つの特徴として、離職率の高さが挙げられます。タイでは、転職を繰り返して経験を積むことでキャリアアップを図っていくことが一般的となっており、従業員の会社に対する帰属意識はあまり高くないと言われています。また、人間関係や処遇、労働環境など、就業面に不満がある場合には、我慢することなく辞めてしまうことが多々あるようです。

4. まとめ

文化や職業観の異なるタイにおいて、日系企業の経営者からタイ人スタッフのマネジメント面で

苦勞しているとの声が多く聞かれます。当行では、海外展開における様々なネットワークを有し、海外での事業運営をサポートしておりますので、活用を検討される際は、是非お気軽にお問い合わせください。

また当行では、バンコクに駐在員事務所の設立を予定しております。引続き、皆様の海外展開をサポートできますよう、タイを中心としたアセアン地域の情報収集を行ってまいります。

【ニュース一覧】

〈香港〉

- ・経済
 - －8月の日経・香港 PMI49.7 に低下、5ヵ月ぶりの節目割れ(9/6)
 - －6～8月の失業率 3.1%、3期連続で横ばい(9/19)
 - －香港と ASEAN との FTA 交渉が妥結－11月締結へ(9/11)
- ・金融
 - －金融センター番付、世界 3 位に再浮上(9/13)
- ・不動産
 - －1～8月の新築高級住宅成約件数、前年同期比 60%増加(9/8)
 - －住宅価格、2017 年内に 5%上昇－C&W 予測(9/14)
- ・その他
 - －4～6月の香港港貨物取扱量、前年同期比 11%増加(9/11)
 - －香港の平均寿命、世界一を堅持(9/12)
 - －7月の香港への旅客数、前年同月比 2.4%増加(9/1)
 - －香港の国際学校、44 校で授業料値上げ(9/11)

〈広東省〉

- ・経済
 - －8月の広東省製造業 PMI50.9 に減速(9/4)
 - －1～7月の広州自動車輸出、前年同期比 52%増加(9/6)
 - －深圳市の GDP、2018 年に香港越えの公算(9/8)
- ・不動産
 - －8月の深圳市住宅価格、前月比 0.1%低下(9/5)
 - －深圳市、高級オフィス賃貸純増面積で全国トップ(9/13)
- ・労務
 - －広州市の最低賃金、3年に1回改定へ(9/15)

・その他

- －広州市・深圳市など、2020年までに公共バスの全面EV化(9/11)
- －深圳市、2020年までにEV用充電スポットを12万基整備(9/11)
- －広東省内企業、中国企業トップ500社に51社ランクイン(9/12)
- －広東省の富裕層、27万世帯で全国トップ(9/7)

(出所:各種新聞報道等)

【香港コラム】

－中秋節－

中秋節とは、毎年旧暦8月15日(本年は10月4日が該当)に、中華圏で旧正月(春節)の次に重要とされている伝統行事です。中秋節が例年行事となった由来は諸説ありますが、一般的には民族神話とその発祥とされています。本稿では詳細を割愛いたしますが、後述の中秋節における習慣や食べ物、飾り物などは、民族神話に深い関係があると言われています。

香港では、中秋節の日に「家庭円満」という願いを込め、夜に家族が一堂に会し、食事をします。食事の後には、ランタンと月餅を持ち、公園や広場、浜辺などへ赴き、のんびりとお月見をすることや恋人同士ではデートをすることなどが、一般的な過ごし方となっています。そのため、中秋節の日には、公園が家族や若者で溢れかえることも珍しくありません。

香港のランタンは、金魚やウサギなど様々な形をしたものがあり、色合いも様々です。中秋節の時期には、街のあちらこちらでランタンが売られ、ビクトリア・パーク(香港島にある大規模な公園)は毎年違ったテーマで大きなランタンが展示され、辺りは幻想的な華やかさに包まれます。

そして、中秋節に絶対欠かせないものが月餅です。日本のスーパーやコンビニで売られている月餅は、あんこの入ったお饅頭のようなお菓子ですが、伝統的な月餅は、蓮の実や小豆に油やラード、塩漬けの卵の黄身や甘い餡など、具材がたっぷり入ったお菓子となっています。その中でも、黄身が2個も3個も入っているものは、高級品として扱われています。

月餅は、友人や親族の家に来る際の手土産にもなり、また、季節の挨拶として、取引先や会社の上司、同僚、友人との間で、互いに贈り合う習慣があります。日本でいうお中元のようなイメージでしょうか。そのため、この時期の香港では、そこかしこで月餅を目にします。一部の人は月餅をもらいすぎて困るという方もいるようですが、全くもらえなくても寂しくなってしまうという不思議な食べ物でもあります。

以上のように、香港の中秋節は、「ランタン片手にお月見をして、月餅を食べる」という風に、盛り沢山の行事になっています。普段は、都会の喧騒に包まれている香港ですが、季節感溢れるこ

の時期は、街の印象も違うことと思います。この時期に香港を訪れた際は、是非季節限定の本場の味「月餅」を試してみるのも、一興かと思います。

(月餅)



(金魚のランタン)

